

## 政治学概論 II 2024 w8-10 (2月5日) 授業の感想

氏名	Q1	Q2
岩田	「国家を拘束する法規則を組織的に定立する立法機関なし」	国際法には立法機関がないことから、強制力がなく、法の支配が確立されていないことから、国際法は法として成立していないのではないかとこのところが重要であると感じたから。国際法における合意は単なる約束事に過ぎず、約束している間は拘束されるというようなものであると考え、この状態ではやりたい放題になってしまい、ますます戦争を止めることができないのではないかと考え、国際法の必要性が揺らいでしまうと考え。
内坂	慣習国際法について	慣習国際法の性格についての部分が印象に残ったからである。学習するまでは、慣習国際法は不文法であるため、成文の法にしたほうが各国への法的拘束力も強まり、より国際社会が一体化できるのではないかと私は感じていた。しかし、あらゆる事柄の条約を作って、それにすべての国が参加することは難しいのが現実である。そこで慣習国際法が、ゆるやかに国際社会全体を包み込む法規範として存在することで、最小限の法秩序の維持に役立つということが興味深かった。曖昧な不文法であるからこそ、その、国際社会の中での役割が印象に残った。
宇名手	国際平和への動き	これまで、国際平和を目的として、国際連盟 (後に国際連合) などの国際機構が設立されたにも関わらず、完全な平和は訪れていない。新たな兵器を生み出すことで、隣国もそれに対抗するかのように兵器を生み出したり、自由貿易を開始することで平和になるかと思いきや、相互依存的な関係性になったことで嫉妬による争いが発生するなど、どこかで成功した事例が必ずどこでも成功するわけではないということ、その時その場に応じた解決方法を見つけることが重要であり、難しいことであるように感じた。
遠藤	軍備管理における予測可能性を高めることが重要であるということが面白いと思った。	潜在的な対立国であれば互いに軍備管理についての情報を知られない方がよいだろうとなんとなく思っていたが、互いに軍備情報を公開しながらコミュニケーションをとったりそれをもとに戦略を練ったりすることで透明度を上げることにつながり、誤算や誤解によって意図していない紛争やその発展による戦争が起こることを防ぎ結果的には、軍事的関係の安定化が図っているということを知って面白いと感じたから。
大石	国会中継の見方に重要性を感じた。	国会中継は講義内で言われていた通り自分も普段ニュースや SNS で断片的にしか見ることがないが、やり取りを長く見ることで大きく印象が変わったから。特に答弁において私は総理大臣や各大臣が主に発言しているイメージがあったが、官僚が情報提供のため多くの機会に発言しており、国会での発言者の割合に対してのイメージが変わった。また官僚が答弁の最中も活発に議員のところに行っているところも印象に残った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
大久保	何をどう比較するのか	比較政治学を建林氏らは適切な方法によって事実認識及び因果関係の解明を行う学問だとしているが、スポーツのルールが変わればプレイが変化すると同じように、原因がどのような結果を引き起こすのかということを重視しており、政治的帰結の予想が可能になるが、因果関係の順番であったり、どのように用いるのかによって、都合がよいように解釈することが可能になるということを知った。
片山	予算委員会の立憲	個人的には立憲民主党はとても嫌いだが、この質疑は立憲が良いことを言っていると思った。ネットやテレビは、印象的な場面や映像を意図的に切り取って相手を悪く見せる等をよくするので、党や政治家の印象が捻じ曲げられることが良くある。なので、フル尺の動画を見たり、いろんな局や SNS の情報を見比べたりする、情報リテラシーがかなり大切になってくると思った。
加藤	国際法を学ぶ意味が重要だと思った	国際法は、世界を平和で協力的な状態にするために重要だと思ったからである。国際法は、異なる国々の間でどのようなルールが適用され、どのように紛争が解決されるかを理解するための重要な基盤となっている。また、法のなかには個人の人権を守るための規範も含まれ、国家の枠を越えて権利を守ろうとすることで、人権の尊重を促進している。グローバル化が進んだ現在では、国際問題に対処する上で国際法の知識が必要不可欠であると考えられる。このように、国際法は、世界平和と安定のための基盤となることから、学ぶことに意味があると考ええる。
喜多川	安全保障のジレンマの解消	安全保障のためにある国が軍備を整えると、それを警戒して違う国も軍備を整えてしまうという安全保障のジレンマがあるが、その解決策として信頼醸成措置があった。これは敵国同士で基地を見せ合ったり、軍備情報を公開したりすることによって緊張緩和を目指すものであり、そのような予測可能性を上げるという考えはこれまでなかったので印象に残ったから。
黒田	国際法と国内法	国際法には、ハーグ条約のように、異なる国同士に関わる法があるが、関わっている国の国内法には、その国際法と同じような条約がない場合もあり、その場合、事例のように民事上の問題が発生したり、相手の国に判断を任せたりしなければならないため、国際法と国内法の違いについてよく考えることが大切だと感じたから。また、国際法と同じような国内法を作成しない国がなぜ作らないのか、という理由が知りたいと思った。
小松原（暖）	主権国家システムの明示	大国は小国に対して、平等とは言えないような外交政策を行っていたりする一方、近年では中小国家の総会等での投票行動が重要となっており、小国を無視できなくなっているという点が印象に残った。日本の ODA や中国の一带一路などの政策も実際は「小国の好感をよくしておくため」という受け取り方ができ、国際連合憲章上は「すべての国家は法上平等」としているが一部の力の強い大国主導の世界であることに変わりないと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
高橋	国際法を学ぶ意味の箇所が重要だと思った。	この箇所を学習する前まではあくまで慣習法に過ぎず、法としての強制力や拘束力が十分に機能しているとは言えない国際法はただ単に国際社会における形式上の規則でしかなく、なかなかその存在意義を見出せなかった。しかし、今回の授業を通して、国際法は法としての機能面を担うのではなくその法的思考が国際関係を把握し、統御するための道具として必要であることを学び、今までの国際法に対する認識が大きく変化したからである。今後教員として授業で国際法を取り扱う際には決して断片的に教えるのではなく、各国の政府および市民団体が自らの実践を正当化するために国際法を利用しているという事実等をしっかりと伝え、児童生徒が国際法について多面的に考えられる指導を行っていききたい。
田辺	紛争の問題だけでは国際的に対応されにくいということ	中東地域における紛争は国際介入されやすい。一方で、ミャンマーなどの東南アジアにみられる紛争は注目されにくい。これらの違いには、中東には石油資源があるといった地理的な背景に起因している。国際社会の諸問題の解決に向けてでは、各国の国益とその国の地理的背景や経済状況といった国際社会に与える影響を考えていくことが重要であると考えた。
爲石（康）	国会中継	国会中継を見ることは国の政治を考える上で客観的にみることができる上で教材としてとても重要なものであると感じた。メディアが発達したことで政治家の国会の様子や演説の様子などが中継、動画配信されている。しかし、それらは国会議員が誤ったことをしているなどの偏った情報が多い。生徒は知識がないためその情報をうのみにして誤った知識を獲得してしまう可能性がある。それらを防ぐために、授業内で国会中継や地方議会などを視覚的にみさせることが重要であると感じた。
為石（智）	国際法への疑問	平和の維持を目標とするための国際法が実効性を持たないことに、安全保障のジレンマが大きく関係している。安全保障のジレンマの下では、国家が一方的に自国の安全を確保するために動くため、集団安全保障の枠組みが機能しにくくなる。したがって、軍拡は国際法の枠組みでは解決できない。
丹後	国会中継について	これまでの国会についての印象では、テレビのニュースなどで取り上げられるような、荒れている様子や居眠りの様子などあまり良い印象ではなかったが、今回実際に過去のアーカイブや中継を見てみて、質問や返答が適切に行われているように感じた。これまでの印象とは違うものだったので、今後教員になった際には、荒れている様子などだけでなく、適切に会議が行われている様子もともに見せていく必要があるなど感じた。
富谷	比較政治学について	比較政治学には様々な比較する分野があるという事がわかった。授業内では、新制度や、体型論、文化論、理念論の四つが紹介されていた。比較政治学という単語事態を初めて知った。比較政治学では適切な方法を用いて比較を行わなければ、社会科学として不十分となり、感情や思い込みの発露として終わってしまうという事も分かった。また、今回の授業の中で印象に残ったのは、文化は説明のゴミ箱という表現が特に印象に残った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
西田	国会の映像	国会の映像をいくつか視聴してみて、今まで持っていた国会のイメージが変わったため重要だと感じた。これまでは、国会の映像をニュースで見ることがほとんどであった。中でも議員や大臣らが激しく討論をしたり、ヤジを飛ばしたりする様子が印象に残っていたため、国会にはあまり良いイメージがなかった。しかし、実際に見てみると意外と落ち着いた様子で、互いが真剣に発言をしている様子があった。このようなことから、ニュースで取り上げられる国会は切り取られたものであり、本来とは印象がかなり変わっているということを知っておかなければならないと考えた。
丹羽	国会中継	「国会中継」の印象は、NHK でいつも放送しており、おばあちゃんがいいつも見ていたため、このキーワードが面白いと感じた。自分がこの「国会中継」について考えたことは「若者は一切見ていないのではないか」ということである。まず、「国会中継」をやっている時間帯は朝や 15 時ごろの昼である印象が強く、若者は学校などに行っている時間である。「若者の政治離れ」が近年ではうたわれているが、こういったところも若者に配慮しないとどんどん政治に関心がなくなっていくと感じた。
野田	国際法に抵触する国内法が有効かどうかについての議論	国際法においては認められても、国内法では認められないといったことは少なからず起こりうることだと考えられる。国際法、国内法、どちらも法であるため、一定の拘束力を持つものである。しかし、法の範囲に収まらず、その解釈をめぐって争うことが多くある。法の解釈に関することは、国際的にでも、国内的にでも起こりうることなのだと感じた。どこまでを許容し、どこからを許容しないかといったことは難しいが、個々の事例にとって最良の選択がなされ、それが判例として蓄積されていくことが望ましいのではないか。
原田	国際法の正統性の由来	国際法の正統性の由来の特に法源で判例や学説、未発効条約などの様々なものが国際法の一部となりえることに驚いた。また、世界人権宣言のように法的拘束力のあるものではないが、国際社会の数少ない共通の価値を公に宣明にし人々の心の規範意識とするゆるやかな合意がされるものが非常に重要であると感じたから。法的拘束力を持たずとも世界人権宣言の内容を破るようなことがあれば周りの国が批判をすると思うから、各国が監視し合っている状態が生み出されるようにもなることがあり得るのかなと思った。
藤井	日本政治のおかしなところ	予算は事前に自民党内部で決められているため、野党が議論を持ち掛け行っても予算再編成には中々つながらないということは、議論を交わしながら行う政治とはかけ離れているように感じた。また、自民党内部で取り決めた予算案がなぜ公開されないのかが疑問だった。国家全体に関わる重要な決め事である分、一部でも野党、国民に開示すべきではないかと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
藤田	有識者の投票行動について	有識者も与えられた情報だけを鵜呑みにするのではなく、自分で調べ、時には疑いの目を持つことが大切であると考えたから。現代社会では、SNSの普及やショート動画の普及によって政治家の切り取り動画や、偽動画が出回るようになってきた。確かに、ショート動画を活用することで、政治家と国民の距離を縮めたり、政治家や政治に対して親近感を感じさせる効果はあると思う。しかし、悪質な切り取り動画などは、誤解を生んだり、間違ったイメージを与えかねない。そのため、そういった動画を鵜呑みにせず、複数の情報と比較して判断するなど、ちょっとしたひと手間を加え、正しい情報解釈をする必要があると感じた。
本間	大国が中小国の意見を無視できないことについて	主権国家体制は模擬大国支配であるが、国際機構においては、中小国家の投票行動が重要となることを知り、大国としての立場を守っていくためには、中小国の意見を無視できないという関係性が大国の行き過ぎた支配を抑制する要因になっていると感じたため。また、国際的正当性が大国の行動に影響を与えていることを知り、国際法は実効性が脆弱であっても共通の認識をつくれることに意義があると理解できたため。
松本	国会中継について	私たちが普段目にしているメディアではある種の決めつけのようなものに繋がるものが多く、情報を探らずに判断することの危険さについて再認識することが出来た。しかし質問に対してははっきりと答えていないと思われる場面が複数見られ、論点がずれていると感じることも多々あった。寝ている議員がいるということやスキャンダルがどうこうと言う前にまずは情報を正確に国民に伝え有耶無耶にしないといったことを心がけていくべきなのではないかと感じた。また今回議論されていた高齢者へのデバイスの支援などについて知らないことが沢山あり、予算がそこまでかけられていることを全く知らなかったためもっと日頃からそういった情報に敏感になっていきたいと感じた。
三島	因果関係のない共変	因果関係のない共変について学んだことが印象に残った。特に、見かけの相関や原因と結果の逆転といった問題が、データ分析においていかに誤解を生みやすいかを再認識することができた。例えば、「政治腐敗があるから、それに都合の良い宗教が採用される」という例は、一見すると直感的に納得しやすいが、本当にそうかを確認するには、時間的な前後関係をきちんと見極める必要がある。また、第三の変数の影響を排除しないと、相関を因果と誤認してしまう危険性もあると分かった。さらに、単に相関を示すだけでなく、因果関係を支えるメカニズムを解明し、有力な代替仮説を反証することの重要性も強調されていた。データ分析が普及する中で、こうした視点を持たずに結論を急ぐと、誤った解釈を広めることになりかねない。今後、論文やニュースを読む際にも、因果関係の根拠をより慎重に考える姿勢を持ちたいと考えた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
吉岡	「文化は説明のごみ箱」	私は授業内で扱った比較政治制度論の中で出てきた「文化は説明のごみ箱」という言葉を聞きすごく納得した。高校の時も大学に入ってから社会科の授業を受けていると、文化の違いによる対立や争いという事象をよく扱う。しかし、文化という言葉はそれらの物事を簡単に片づけてしまうためのものに過ぎず、社会科を学ぶという事はその背景にある本質的な部分を見ることなのだと感じた。
渡邊	法の性質について	国家を拘束する法規則を組織的に定立する立法機関はなく、法の解釈は国によって異なることから、基準などが異なってしまうという問題があるのではないかとすることが重要だと感じたから。国際行政は各国の主権的統治機能にほとんど委ねていることで、それぞれの国で同じような法であったとしても、内容が大きく異なっていたりすると公平性に関する問題も出てくるのではないかと感じた。